

巻頭言

技術センター長 藤久保 昌彦



広島大学技術センターが、広島大学に働く技術職員の全学一元化組織としてスタートして3年を経過しました。最初の2年間は、技術センター内の運営体制あるいは相互協力の基盤作りであったとすれば、この1年間は、これからの技術支援体制の具体像の構築および対外的な技術交流事業に、その基盤が大いに活かされた年であったと思います。具体的には、運営会議および企画調整部会の議論を経て、業務依頼・派遣システムの試案がまとまり、平成19年度からその試行を段階的に開始することになりました。また定員削減への対応の議論を通じて、全学的視野から適材適所に人材を配置する方針を明確化しました。さらに、工作分野、情報支援分野等では、従来の部局を超えた技術支援が始まっています。しかしながら、これらを実効的な全学システムとして確立・定着させるためには、試行によるフィードバックを通じた多くの議論が必要であり、これからが正念場と位置づけています。一方、対外交流事業として、平成18年度は第6回機器・分析技術研究会と第4回ガラス工作技術シンポジウムを技術センター主催で開催し、全国から多数の参加を得ると共に活発な技術交流がなされました。これらは、技術センター職員の部門を超えた協力を基になし得たものです。

以上述べたように、技術センターとしての各種の体制整備および活動が行われていますが、技術職員個々にとって最も大切なことは、日々、技術・技能を研鑽し、それを教育・研究支援に具体的に活かすことに他なりません。またその成果を対外的に伝え、アピールすることが必要です。本年度もそうした成果の一部が、この技術センター報告集としてまとめられ、発刊の運びになったことは大きな喜びです。本報告集を通じて広島大学技術センターの活動内容ならびに職員の技術シーズを広くご理解いただくことができれば幸いです。

最後に、本報告集の編集にご尽力いただいた木庭亮二委員長を始めとする技術センター報告集編集委員会の方々、投稿者の方々、そして種々ご援助いただいた学部学術推進グループの方々に厚くお礼を申し上げます。

平成19年4月